

第1部 広域調査から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28208

第 1 部 広域調査から

第1章 石川県の太鼓文化——広域調査結果をもとにした類型化の試み

野澤 豊一（金沢大学）

I はじめに

金沢大学日中無形文化遺産プロジェクトでは、2009年度に、石川県の太鼓文化についての広域調査を行った。基本的な手法は次のとおりである。まず2009年の時点で社団法人石川県太鼓連盟に加盟している太鼓団体に対して、活動についての基礎的な聞き取り調査を行った。それらの団体からは同時に連盟に非加盟の太鼓団体の情報を得て、その非加盟団体にも同様の聞き取り調査を行った。聞き取り調査は、アンケート用紙の送付および電話調査が主である。

当然のことながら、この調査でカバーしきれなかった太鼓団体は少なからずあると思われる。そればかりか、民俗文化としての太鼓とは、ほんらい地元の祭事や神事に埋め込まれたものも多く、それゆえ「太鼓」という独自のカテゴリーで認識されていない場合も少なくない。したがって、厳密に広域調査を進めようとするれば、石川県内の各地の役場を通じて各地区の町内会長とコンタクトをとるなどする方法が最適と思われるが、時間と経費の関係から、今回の調査はかなり簡略化されたそれというわけである。

実施した調査をもとに2010年3月に作成したのが『いしかわ太鼓まっぷ 2010』（以下『太鼓まっぷ』と略す）であり、そこには、各太鼓団体の基礎的な情報を収録した。ただし、『太鼓まっぷ』自体は、調査結果の生データに近いものであって、分析は行っていない。本章では、『太鼓まっぷ』作成過程で得られた情報と、その後の簡単な補足調査で得られた資料¹をもとに、石川県全域の太鼓文化のラフなスケッチを描いてみたいと思う。上述の通り、この調査では石川県の太鼓文化の実態がくまなく分かったわけではないため、ここで提示するスケッチも不完全なものでしかありえない。しかし、そうではあっても、ためしに全体像を見ようとする事で分かってくることも多いのではないと思われる。

さて、『太鼓まっぷ』では、地域を次の4つに分けて記載している。

- ・奥能登エリア——珠洲市、輪島市、能登町、穴水町
- ・口能登エリア——志賀町、七尾市、中能登町、羽咋市、宝達志水町
- ・金沢エリア——かほく市、津幡町、内灘町、金沢市
- ・加賀エリア——野々市町、白山市、川北町、能美市、小松市、加賀市

¹ 本年度に行った補充調査では、津幡町教育委員会生涯教育課（戸谷邦隆氏）と白山市教育委員会文化課（村上和生雄氏）から資料を提供して頂いた。記して感謝を申し上げる。

これは、調査を始めるにあたって参考にした「石川県太鼓連盟」の会員名簿の区分に倣ったものなのだが、調査を進めるにつれて、この区別により、石川県内の太鼓文化の地域性をうまく提示できることが分かってきた。

本章では、次の手順で記述を行う。まずは、上の地域的な分類を踏襲して、各々の地域で見られる太鼓文化についての社会的な背景を述べ、石川県における太鼓文化の全体像を描く(Ⅱ節)。次に、その作業で浮かび上がってきた特徴をもとに、演奏スタイルを筆者なりに分類する(Ⅲ節)。それらをふまえて、最後に今後の研究の展望を述べる(Ⅳ節)。

Ⅱ 石川の太鼓文化

本節では、『太鼓まっぷ』作成にあたって収集した資料を整理しつつ、石川県の太鼓文化の全体像のラフスケッチを試みる。各々の演奏スタイルについて詳述するのは次節にゆずることにして、本節ではアンケートおよび聞き取り調査で得られた資料から読み取れる事柄を中心に記述する。記述は、先に説明した「奥能登エリア」、「口能登エリア」、「金沢エリア」、「加賀エリア」の順に行う。

各エリアについての概説を述べる際には、『太鼓まっぷ』で得られたアンケートに対する回答をもとにした表を提示するが、このなかでも「演奏スタイル」という欄に限っては、筆者がかなり手をいれて整理し直していることをことわっておく。というのも、似たような太鼓のスタイルであっても、あるグループは「雨乞太鼓」と言い別グループは「伝統の太鼓」と言うのでは、なかなか客観的な分類に近づけないからである。

また、本章では太鼓団体および太鼓文化の担い手集団のことを「グループ」と呼んでいる。以下の記述からも明らかのように、ここで取り上げる太鼓団体および担い手集団には、太鼓を演奏することが目的の個人が集まったものもあれば、集落の祭礼を担うための青年団が含まれる場合もある。「太鼓グループ」と表記した場合には、ふつうは後者が含まれることはないかもしれないが、本章ではそうしたケースも、その人々が特定の太鼓文化の担い手集団であるという意味合いから、そう呼ぶことにする。

1 奥能登エリア

まずは奥能登エリアの太鼓グループである(表1)。奥能登地方を特徴づけているのは、第一に輪島市名舟^{なぶね}を本拠地とする「御陣乗太鼓」^{ごじんじよ}を代表とする鬼面の太鼓と、第二に伝統的な地元の祭礼とかかわりの深い「キリコ太鼓」と呼ばれるものである。前者には一般名称がないので、ここでは「鬼面太鼓」と呼んでおこう。奥能登の全 37 グループのなかで、この2つのタイプのいずれかに当てはまるのは、32 グループにおよぶ。そこで以下では、この2つについて説明しよう。(奥能登にも「創作太鼓」のグループはいくつか存在するが、それらについてはより高い割合で存在している金沢エリアと加賀エリアの項で説明することにする。)

キリコ太鼓を中心とした「祭囃子タイプ」の太鼓

まずは、奥能登エリアで 16 のグループが当てはまる「祭囃子タイプ」の太鼓であるが、奥能登の場合この大半は「キリコ太鼓」のことである。能登半島一帯では、「キリコ祭り」と呼ばれる夏祭りがある。「キリコ」とは巨大な灯籠のことをいうが、これを神輿のように担いで村内をねり歩く際に、笛や鉦と太鼓のお囃子がつくのである。また、神事や門付けをしたり休憩中にキリコが停止したりする時には、二人一組で自由に太鼓を打ち鳴らす場面が見られる（写真 1，2；太鼓は多くの場合、キリコにぶら下げてあるか、キリコや太鼓専用の台に載せてある）。これらの場面で打たれる太鼓のことを、ここでは「キリコ太鼓」と呼んでいる。



写真 1（左） 輪島市名舟大祭のキリコ太鼓（撮影筆者）

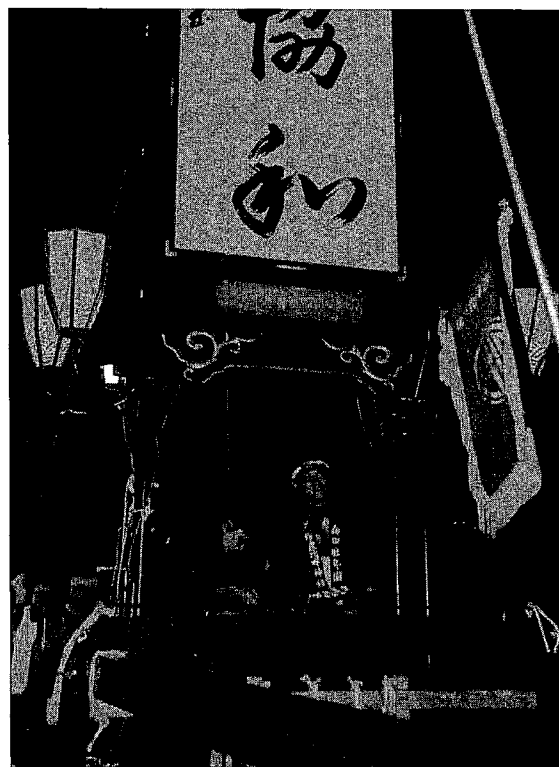


写真 2（右） 能登島の向田火祭りのキリコ太鼓（撮影西島千尋氏）

この種の太鼓が本来各々の集落の祭礼に埋め込まれており、集落の祭礼でのみ叩かれているということを考えると、実際に奥能登に存在する「祭囃子タイプ」の太鼓実践集団の数は、『太鼓まっぷ』に収録した数をかなり上回るだろう。『太鼓まっぷ』に収録することができたのは、祭りのキリコ太鼓を、祭り以外の集落内外のイベントでも、ほぼそのままのかたちで演奏しているグループである。だから実際には「祭囃子」を純粋に行っているわけではないのだが、これらのグループのパフォーマンスは、本章で取り上げるその他のタイプほどには、「見せる芸能」としての進化をしていない。

表1 奥能登エリア

	グループ名	拠点	練習場所	演奏スタイル	由来	結成年	主な演奏の機会	会費	年間演奏回数	練習頻度
1	狼煙山伏太鼓保存会※	珠洲市狼煙	集会所	鬼面太鼓	○	1975年	イベント	×	20回	本番前のみ
2	漁火太鼓※	珠洲市高屋町	集会所	祭囃子タイプ	×	2003年	—	×	2～3回	月1回以上
3	馬縹キリコ太鼓保存会※	珠洲市馬縹	馬縹休養村管理C*	祭囃子タイプ	×	1950年頃	イベント	×	約4回	月1回
4	御神事太鼓保存会※	珠洲市若山	地元神社	鬼面太鼓	○	1967年	—	×	2～3回	なし
5	長浜巴太鼓※	珠洲市正院	公民館	祭囃子タイプ	×	1998年	イベント、祭礼、慰問	×	10回	月2回
6	珠洲八幡太鼓保存会※	珠洲市正院	—	鬼面太鼓	○	1970年	旅館、結婚式、祭り	×	10回	なし
7	弁天夢太鼓保存会※	珠洲市蛸島	蛸島町活性化C	祭囃子タイプ	×	1996年	イベント、祭礼	○	7～8回	週1回
8	山王太鼓保存会※	珠洲市蛸島	公民館	鬼面太鼓	○	1971年	イベント、祭礼、慰問	×	4回	月2～3回
9	雷神旭太鼓保存会※	珠洲市蛸島	公民館	鬼面太鼓	○	1999年	イベント、祭礼	○	12回	月2～3回
10	龍神太鼓※	珠洲市上戸町	公民館	鬼面太鼓	○	—	—	×	—	本番前のみ
11	八世太鼓保存会※	輪島市曾々木	青年団事務所	鬼面太鼓	○	1970年	イベント	×	5回	月2回
12	町野子ども祭囃子太鼓教室※	輪島市町野町	公民館	祭囃子タイプ	×	1989年頃	イベント、慰問、祭り	×	8回	週1回
13	御陣乗太鼓保存会	輪島市名舟	公民館	鬼面太鼓	×	1960年	旅館、ホテル	×	130回以上	週1回
14	波の華太鼓※	輪島市里町	公民館	祭囃子タイプ	×	2006年	祭り、イベント	○	5～6回	週1回
15	大西山 猿鬼太鼓※	輪島市大西町	個人宅	鬼面太鼓	○	2002年	地元の祭り(昔)	×	—	月2回
16	輪島高州太鼓	輪島市久手川町	公民館	創作+キリコ	×	2001年	イベント、祭り	○	20回	週2回
17	住吉神社御神事太鼓保存会	輪島市鳳至町	市営文化会館	鬼面太鼓	○	1959年	祭り、老健施設	○	数回	—
18	輪島祭り太鼓	輪島市河井町	市営文化会館	祭囃子タイプ	×	1999年	祭り、老健施設、イベント	○	約10回	週1回
19	和太鼓ボアネルゲ※	輪島市稲荷町	深見センター	競技会タイプ	×	2000年	イベント	○	2～3回	週1回
20	輪島・和太鼓 虎之介	輪島市新橋通り	公民館	創作組太鼓	×	2000年	イベント	○	約100回	週2回
21	新橋お祭り太鼓・笛教室※	輪島市新橋通り	町内施設	祭囃子タイプ	×	1998年	町内の祭り	×	—	週1回
22	輪島キリコ太鼓保存会※	輪島市二ツ屋町	市営文化会館	祭囃子タイプ	×	1970年代	イベント、結婚式、祭り	○	6回	週1回
23	鳳至小学校組太鼓※	輪島市気勝平町	浜土自治会館	祭囃子タイプ	×	1979年	祭り、イベント	×	8～9回	週2回
24	あての木比咩太鼓※	輪島市三井町小泉上野	市役所出張所	祭囃子タイプ	×	1996年頃	—	×	—	週1回
25	権現太鼓※	輪島市三井町市の坂	石川航空学園	祭囃子タイプ	×	2001年	イベント、祭り、結婚式	○	約24回	週3回
26	能登黒島天領太鼓保存会	輪島市門前町黒島町	公民館	祭囃子タイプ	×	1945年	イベント、祭り	×	約3回	週1回
27	唐獅子太鼓保存会※	能登町松浪	公民館	鬼面太鼓	×	1978年	イベント、結婚式	×	5回	週1回
28	能登内浦豊年太鼓会※	能登町清真	集会所	鬼面太鼓	×	1955年	敬老回、慰問	×	1～2回	ほぼ無し
29	創神松一門会※	能登町清真	集会所	伝統風創作太鼓	×	—	祭り、イベント	×	1～2回	本番前のみ
30	神事国重太鼓保存会※	能登町国重	集会所	鬼面太鼓	○	1963年	イベント、結婚式、慰問	×	10回	月3回
31	柳田キリコ太鼓※	能登町上町	公民館	祭囃子タイプ	×	1970年頃	祭り、イベント	○	3～4回	月2～3回
32	彌榮太鼓保存会	能登町宇出津	商工会ビル	鬼面太鼓	×	1972年	イベント、ホテル・旅館	○	40～50回	月2回
33	和太鼓「鼓友」	能登町宇出津	高校体育館	創作組太鼓	×	1998年	祭り、イベント	×	6～7回	週1回
34	縄文女組太鼓※	能登町宇出津	高校体育館	創作組太鼓	×	1996年	イベント	○	10回	週1回
35	かんの創神太鼓※	能登町鶴町	公民館	祭囃子タイプ	×		イベント、地区の催し	×	3回	月2回
36	穴水長谷部太鼓保存会	穴水町川島	地元神社	祭囃子タイプ	○	1986年	祭り、イベント	○	約10回	週1回
37	のと半島鹿波獅子太鼓	穴水町鹿波	小学校	創作組太鼓	×	1991年	イベント、老健施設	×	10回	週1回

※印が付してあるのは石川県太鼓連盟に非加盟のグループ

* Cは「センター」の略

メンバー数(男;女)	(20歳未満;20～40代;50歳～)	地元出身者の割合	助成の有無	備考	
6人(6;0)	0;0;6	全員(狼煙)	○	観光ブーム時は年に50～60回出演していた;現在はメンバーが高齢化している	1
8人(0;8)	0;1;7	全員	×	女性のグループ;ここ2年ほど活動休止	2
11人(10;1)	0;10;1	全員	×	周辺集落のキリコ太鼓との差異を保つために結成;現在はイベントにも出演	3
10人(―)	0;5;5	全員	×	NHKが番組のために市役所を訪れたのがきっかけで発足	4
6人(0;6)	0;2;4	全員(正院)	×	キリコ祭りでの太鼓の打ち手確保のために結成;女性のグループ	5
10人(10;0)	0;4;6	全員	○	―	6
9人(2;7)	0;6;3	5割	×	キリコ太鼓をもとにした創作太鼓;子供にキリコ太鼓を教えている	7
10人(5;―)	5;5;0	全員	―	地元の大人が保存目的で子供に教えている	8
7人(7;0)	0;2;5	全員	―	―	9
6人(6;0)	―(※全員40代以上)	全員	×	―	10
12人(12;0)	2;9;1	全員	○	―	11
21人(―)	21;0;0	全員(町野小)	○	町野をPRするためにあるイベントに出演したのがきっかけで結成した子供のグループ	12
20人(20;0)	0;7;13	全員	×	県内でも随一の知名度を誇る;メンバーは地元集落(名舟)出身者のみ	13
8人(0;8)	0;8;0	全員	×	女性のみグループ;外部の指導者に教わっているグループ	14
4人(4;0)	0;0;4	全員	―	太鼓ブームをきっかけに集落の伝承を舞台化した;現在は活動休止中	15
15人(10;5)	15;0;0	全員	×	子どものグループ;大人が指導している	16
12人(12;0)	―(※平均40代)	殆ど全員	○	―	17
18人(4;14)	18;0;0	殆ど全員	×	子どものグループ	18
12人(4;8)	3;3;6	全員(輪島市)	―	―	19
34人(18;16)	23;11	殆ど全員	○	子供のグループ;県内外のコンテストで強豪として知られている	20
15人(10;5)	8;7;0	全員	×	町内の祭りのために、地元の指導者が教えている	21
18人(13;5)	5;8;5	全員	―	集落が母体ではないが、キリコ太鼓をイベントなどで演奏する	22
26人(16;10)	26;0;0	全員輪島市	―	子供のグループ;指導者が活動をやめたため、4年前に活動休止	23
6人(2;4)	0;6;0	全員輪島市	×	施設の高齢者を楽しませるため結成;現在活動休止中	24
13人(5;8)	13;0;0	全員	○	教育目的の子供のグループ	25
9人(8;1)	0;1;8	全員	○	―	26
20人(20;0)	2;14;4	全員松浪	○	町長の命令で発足;能登ブーム時は年に260回出演していた	27
12人(12;0)	3;4;5	全員	×	―	28
12人(12;0)	3;7;2	全員能登町内	―	地元の太鼓と三味線や民謡を合わせている	29
10人(10;0)	1;6;3	全員	×	―	30
11人(8;3)	0;9;2	全員	―	祭りが中心の、保存目的のグループ	31
18人(18;0)	0;18;0	殆ど全員	×	神事の太鼓を観光化したもの	32
10人(0;10)	3;7;0	8割	○	女性のグループ;能登のキリコ太鼓と加賀の「三つ打ち」を基本にしている	33
8人(0;8)	0;2;6	全員	○	女性のみグループ	34
9人(9;0)	3;4;2	全員	×	保存目的で結成	35
32人(22;10)	20;3;9	全員	×	保存目的で結成	36
20人(20;0)	5;8;7	全員	○	過去には県外の指導者に教わっていた	37

これらのグループに共通しているのは、次のような事柄である。まず、基本的に農村部の集落が構成単位となっているため、メンバーのほぼ全員が一つの集落に在住しており、練習などを行うグループの拠点は地区の集会所や公民館である。これらのグループの場合は、保存を目的に結成したものが多そうだ。たとえば、長浜巴太鼓（5）はキリコ太鼓の担い手減少がチーム結成のきっかけだったというし、かんの創神太鼓（35）や穴水長谷部太鼓（36）も、担い手がいなくなったために保存会を結成している。

正院や輪島のような市街地の場合は、同一グループのメンバーの居住地はもう少し広い範囲にわたっている。そうした場合は、小中学校の「校区」が一つの単位となりやすい。また、子どもが中心のグループの場合は、キリコ祭りの担い手を確保するという意図でグループが結成されたという場合が多い。たとえば、町野子供祭り囃子太鼓教室（12）や輪島祭り太鼓（18）は、幼稚園から中学生の子供にキリコ太鼓を教えて、祭りだけでなくイベントにも出場している。

やや珍しい例として、まず輪島キリコ太鼓保存会（22）があげられる。メンバーは、キリコ太鼓の演奏が好きで集まった人々で、奥能登内の様々な集落のキリコ祭りに出かけては、助っ人よろしく村の太鼓を叩くのだという。また、イベントなどを専門にキリコ様式の太鼓を叩くグループもあり、それらのなかには、女性のみで結成された漁火太鼓（2）や長浜巴太鼓（4）、子供のための鳳至小学校組太鼓（23）、出張所「あての木園」の職員によるグループであるあての木比咩太鼓（24）などがある。

鬼面太鼓タイプ

次に、奥能登エリアに 14 グループ存在する「鬼面太鼓」についてである。鬼面太鼓は、鬼の仮面をつけた数名の男たちが、1 台の長胴太鼓を代わる代わる叩くというスタイルを典型としている（写真 3；太鼓の叩き方自体は、少し後で説明する「能登の太鼓」と基本的に同じである）。これらのグループに共通しているのは、次のようなことである。まず、グループの結成年が 1960 年代から 1970 年代に集中しているということで、これはちょうど能登半島が多くの観光客を集めていた時期に重なっている。鬼面太鼓の代表格で、全国にも最もよく知られている御陣乗太鼓（13）の保存会が結成されたのが 1960（昭和 35）年で、その 4 年前の 1956（昭和 31）年には、能登半島の外浦を舞台とした映画『忘却のはなびら』が公開されている。つまり、鬼面太鼓としてカテゴリー化できるグループの多くが、その成功を後追いで結成されたとみることができるのである²。

² もちろん、こうした説明には常に反論がつきもので、名舟周辺の集落に行くと「仮面をつけて太鼓を叩いたのは、うちの方が先だった」などというふうに語られることもある。たしかに、起源にまで遡ったオリジナリティについては知りようがないが、御陣所太鼓が他に先駆けて、能登半島以外の観客を意識した演出を始めたことには、疑いがない。

筆者は、鬼面太鼓タイプのグループのうち、御陣乗太鼓について少し詳しい調査をしたことがあるが、御陣乗太鼓の場合は、太鼓の演奏が副業としてある程度成り立っているという事情がある。もちろん、御陣乗太鼓は現在では例外的に需要があるグループなのだが、他の鬼面太鼓タイプのグループも、以前はそれなりに経済的な恩恵を受けていたと考えられる。

これらのグループの多く（14 グループ中 10 グループ）が、平安時代や江戸時代にまでさかのぼる太鼓の由来を保持しているが、たとえば御陣乗太鼓の場合、演奏時に次のような伝承を語る。



写真3 鬼面太鼓タイプの彌榮太鼓

（提供：彌榮太鼓保存会）

——天正4年（1576年；筆者注）、越後の上杉謙信は、能登の七尾城を攻略して、その余勢をかって奥能登平定に駒を進めた。上杉勢は各地を平定し、破竹の位置おいで名舟村に攻め寄せてきた。武器らしいものがない村人たちは、鍬や鎌を持ち出して迎撃の準備をしたが、敵に対して自分たちが無力なことは明白であった。しかし村人たちは、…（中略）…樹の皮で仮面を作り、海藻を頭髮に見立てて、太鼓を打ち鳴らしながら寝静まる上杉勢に夜襲をかけ、…（中略）…退散した。——

このあたりにも、観光を背景に形成されたという、鬼面太鼓のグループの歴史を読み取るべきだろう。というのも、太鼓の叩き方としてはこれらの鬼面太鼓とそれほど変わるものがない、各集落の祭礼で叩かれるキリコ太鼓やその他の伝統的な能登の太鼓では、類似の由来がほとんど見あたらないからである。次節で見るように、鬼面太鼓のパフォーマンスが基本的に外部からの目を意識したものだということを考えると、この種の伝承がはっきりと残っていることと、観光というコンテキストは、いわば背中合わせの関係にあったといえる。

鬼面太鼓グループの構成単位は、先の祭囃子タイプと同じく一つの集落であり、メンバーのほぼ全員がその村の住民である。メンバーには会費がなく、いわゆる「練習」をしないチームが多いのも特徴である（14 グループ中6 グループ）。また、鬼面太鼓を叩く演奏者は全員が男性で、女性が一人もいないが、これは後に述べる「創作組太鼓」タイプとは正反対の特徴である。このあたりからは、鬼面太鼓が伝統的な祭事の名残を深くとどめているという事情がうかがえる。

最後に、能登半島の観光ブームが収束した現在、鬼面太鼓グループの多くで高齢化が進んでいる

ことが、今回の調査で明らかになった。一部の例外もあるが、グループ代表者からの聞き取り調査からは、一時期の盛況ぶりと比べて近年の彼らの活動がいかに斜陽にさしかかっているかということがうかがえた。

「能登の太鼓」という演奏スタイル

ところで、ここで「キリコ太鼓」と「鬼面太鼓」と呼んできた演奏スタイルは、どちらも基本的には同じものである。どちらも、基本リズムを担当する「小バイ」（「バイ」は撥^{ばち}の意味）と個人の太鼓の腕を見せる「大バイ」とが、即興をおりまぜて演奏するというものである。これは、能登半島一帯でかなりの程度共通した叩き方なのだが、地域によって「豊年太鼓」とか「雨乞太鼓」と異なった呼び名が異なるばかりでなく、伝承にもばらつきがある。また、ふつうは長胴太鼓が使用されるが、キリコ太鼓のなかには平太鼓も使われるといった違いがあるし、同じ長胴太鼓でも、台の上に据え置きにするか長い木の棒に結わえてぶら下げるといった違いもある。さらには、キリコ太鼓のように祭事に完全に組み込まれたかたちで実践されている場合もあれば、伝統的な祭礼とは別の文脈で演奏されるものもある。

このように、演奏される機会や演出方法などにはかなりの幅があるとはいえ、演奏スタイルとしてどれも互いにかなり似通っていることは事実である。そのため、本章ではこれを「能登の太鼓」と呼ぶことにする。

2 口能登エリア

口能登エリア（表2）を特徴づけるのは、筆者が「競技会タイプ」と呼ぶグループだが、これは全34グループ中で26グループを占めている。また、都合上演奏スタイルとして分類していないが、口能登には「和倉温泉太鼓」という特徴あるグループも存在している。（なお、口能登にもいくつかの創作太鼓はあるが、奥能登エリアと同様にここでは説明を省く。）

競技会タイプの太鼓

口能登エリアの太鼓文化で特筆すべきは、「競技会タイプ」とここで呼ぶ太鼓グループである。なお、このタイプの詳細については、2章から4章にかけて西島千尋が報告しているので、ここでは基本的な事柄を指摘するにとどめる。

まずはネーミングについてであるが、「競技会」とは「県下太鼓打競技会」というイベントの略称で、このイベントは現在能登半島の5か所で、それぞれ年に1度ずつ行われている。口能登を中心に能登半島とその周辺から太鼓打ちが集まり、その年の「大関」と呼ばれる優勝者を決定するものである。「能登の太鼓」と同じく、腕自慢が二人一組になって演奏するものだが、次節で述べるように、叩き方（演出、ばちさばきなど）には特徴がある（写真4）。おそらく、能登一帯に共通する太鼓のスタイルを活用して、超集落的な競争イベントを成立させたのだろう。（ただし、競技会の存在

が既存の太鼓のスタイルをより様式化させたり、そのスタイルを収斂させたりした可能性は残っている（両者の関係は単純に片方が片方を生み出したというものではないかもしれない。）

ここで「競技会タイプ」と呼ぶグループは、競技会への参加が活動の重要な部分を占めるグループのことである。競技会でかれらが叩く太鼓のスタイルは、前項の奥能登エリアのそれと基本的に同一である。ただし、口能登を代表する競技会タイプの場合、演奏のコンテクストが大きく異なっている。競技会タイプのグループの活動は、祭りへの参加、イベントでの演奏、創作太鼓の演奏と多岐にわたっているのである。これらのグループに見出されるいくつかの共通点を、表2を参照しながら以下に述べてみよう。



写真4 七尾で行われた競技会で競う太鼓打ち
（撮影筆者）

まずは、グループの地理的な広がりについてである。先の「祭囃子太鼓タイプ」や「鬼面太鼓タイプ」と異なり、競技会タイプの太鼓グループは、必ずしも伝統的な祭礼が母体にはなっておらず、むしろそうした例は少数派である³。したがって、メンバーは集落単位というよりは、校区以上の広がりを持つ地域から集まっている場合が多い⁴。それに関連して、練習場所などの活動拠点が、町内や集落の公民館よりも、自治体の管理する「文化会館」や「体育館」というケースが多いことも認められる。

³ だが、現在ではこの太鼓演奏が祭りに入り込んでいる事例が見られる。西島氏によると、競技会タイプのグループのメンバーの地元で祭りとあると、仲間の太鼓愛好家たちがやってきて、祭り自体の進行とはやや無関係に、その場の賑やかしやどんちゃん騒ぎに紛れて太鼓を打ち鳴らす。たいていの集落は彼らの存在をさして気にしないかむしろ歓迎しているが、ごく稀に祭りの主催者側が迷惑がることもあるという。

⁴ 実はこの点は、アンケートの質問項目が十分に練られていなかったという理由で、完全にはっきりした資料に基づいているのではない。ただし、一部のアンケートには校区を単位とした地名が書かれていたことなどから、ある程度予測はできる。

表2 口能登エリア

	グループ名	拠点	練習場所	演奏スタイル	由来	結成年	主な演奏の機会	会費	年間演奏回数	練習頻度
1	富木神幸太鼓	志賀町貝田	町営体育館	競技会タイプ	×	1999年	結婚式、イベント、慰問	—	30回	週1回
2	増穂少年八幡太鼓※	志賀町里本江	小学校	競技会タイプ	○	1969年	イベント、競技会	○	20回	週1回
3	富来八幡太鼓保存会※	志賀町富来地頭町	町営活性化C*	創作組太鼓	×	1968年	イベント、結婚式、慰問、祭り	○	20回	週1回
4	上熊野太鼓倶楽部※	志賀町松の木	公民館	競技会タイプ	×	1989年	慰問、結婚式、競技会	○	5回	週1回
5	志賀天友太鼓	志賀町矢田	町営文化館	競技会タイプ	×	1996年	大会、イベント	—	—	週1回
6	佛木※	志賀町佛木	地元の倉庫	競技会タイプ	×	2003年	小浜競技会、祭り	×	1回	本番前
7	土田子供太鼓クラブ	志賀町印内	公民館	創作組太鼓	○	1979年	イベント中心	○	20回	週1回
8	志賀町手話サークル「しゅわッチ」※	志賀町代田	公民館	—	×	2006年	—	○	1回	月2回
9	葵海道※	志賀町赤住	町営文化館	創作組太鼓	×	2001年	イベント、慰問、祭り	○	9回	週1回
10	朱雀※	志賀町末吉	町営文化館	創作組太鼓	×	2002年	イベントと大会	×	3回	週1回
11	末吉青年団※	志賀町末吉	集会所	祭囃子タイプ	×	1900年頃	祭り、競技会	×	2回	祭前のみ
12	大念寺八幡太鼓※	志賀町高浜	大念寺クラブ	競技会タイプ	×	1987年	イベント、競技会、慰問	○	10回	週1回
13	矢駄青年団※	志賀町高浜	地元の空き工場	競技会タイプ	×	2008年	小浜競技会、祭り	×	1回	週1～2回
14	志賀疾風太鼓保存会	志賀町高浜	町営文化館	競技会タイプ	○	1974年	イベント、祭り	○	30回	週2回
15	志賀豊年力太鼓保存会	志賀町大島	町営文化館	創作組太鼓	○	1974年	イベント、結婚式、大会	○	8回	週1回
16	向田雨乞太鼓保存会	七尾市能登島向田町	市営広場	競技会タイプ	○	—	祭り、イベント	○	数回	週1回
17	鵜浦豊年太鼓※	七尾市鵜浦町	公民館	競技会タイプ	×	1969年頃	イベント、慰問、競技会、祭り	—	25回	週2回
18	和倉いでゆ太鼓保存会	七尾市和倉町	和倉温泉	競技会タイプ	○	1945年	温泉、結婚式、祭り	○	ほぼ毎日	—
19	香島津太鼓保存会※	七尾市石崎町	小学校	競技会タイプ	×	2003年	イベント、祭り	○	15回	週3回
20	石崎豊年太鼓響友会※	七尾市石崎町	市営福祉C	競技会タイプ	○	1997年	結婚式、イベント、慰問、祭り	○	25回	週1回
21	塩津かがり火太鼓	七尾市中島町塩津	集会所	競技会タイプ	×	1978年	祭り、イベント、慰問	—	3回	ほぼなし
22	大田陣太鼓※	七尾市大田町	公民館	競技会タイプ	×	1999年	大会、イベント、祭り、結婚式	×	5回	週2回
23	七尾豊年太鼓保存会	七尾市山王町	公民館	競技会タイプ	○	1951年	イベント、結婚式	○	20回	週3回
24	西湊 鬼楽太鼓※	七尾市直津町	公民館	競技会タイプ	×	2005年	イベント中心	○	40回	週2回
25	正八幡宮太鼓※	七尾市八幡町	公民館	競技会タイプ	○	1993年頃	慰問、結婚式中心	○	25回	週2回
26	飯川天狗太鼓※	七尾市飯川町	公民館	競技会タイプ	○	2004年	イベント、慰問、競技会	○	10回	週1回
27	七尾徳田豊年太鼓※	七尾市徳田町	集会場	競技会タイプ	○	1993年	イベント、競技会、慰問	○	15回	週1回
28	越蘇白山太鼓※	七尾市越蘇町	—(練習せず)	競技会タイプ	×	1975年頃	祭り、競技会	○	3回	練習なし
29	八田龍神太鼓志龍会※	七尾市八田町	八田町作業所	競技会タイプ	○	2004年	イベント、結婚式、祭り	○	5回	週1回
30	鹿島天平太鼓保存会	中能登町井田	町営生涯学習C	競技会タイプ	○	1975年	結婚式、イベント、大会	○	8回	週1回
31	鹿響和太鼓の会※	中能登町能登部	町営カルチャーC	創作組太鼓	×	1997年	イベント、慰問	○	10回	週4回
32	越路野子供登龍太鼓※	羽咋市千路町	公民館	創作組太鼓	×	2002年	祭り、慰問、イベント	○	5回	週1回
33	羽州太鼓	羽咋市柳田	集会所	競技会タイプ	○	1999年	祭り、イベント、慰問	○	5回	週1回
34	一ノ宮不動太鼓保存会	羽咋市一ノ宮	公民館	競技会タイプ	×	1988年	祭り	○	10回以下	週1回

※印が付してあるのは石川県太鼓連盟に非加盟のグループ

* Cは「センター」の略

メンバー数(男;女)	(20歳未満;20～40代;50歳～)	地元在住者の割合	助成の有無	その他	
24人(24;0)	0;24;0	全員志賀町	○	地元の富来八朔祭りに参加している	1
51人(26;25)	51;0;0	9割校区	—	元は八朔祭礼が母体だが、学校の富来小学校校長が児童を教えるよう頼んだ	2
25人(19;6)	0;16;9	ほぼ全員地頭町	○	町の観光課の勧めで祭礼の太鼓打ちをチーム化した;小学生の指導もしている	3
15人(5;10)	11;4;0	全員	○	小学生対象のグループ	4
17人(17;0)	0;17;0	—	—	中学時代の同級生を中心に結成	5
4人(4;0)	0;4;0	全員	×	—	6
22人(5;17)	21;0;0	全員	○	保育園で指導している	7
17人(5;12)	7;10;0	全員	×	土田子供クラブ(7)で教わっている	8
10人(4;6)	10;0;0	全員志加浦小校区	○	子供のグループ	9
7人(1;6)	7;0;0	全員志賀町	×	志賀町のイベント「これでもか!太鼓」のために結成したチーム	10
30人(30;0)	—(※高校生～37歳まで)	全員	×	もとは青年団で、地元の祭りに参加している	11
55人(30;25)	29;22;4	全員	○	全国青年大会に出場するために結成;子供のための教室を開いている	12
6人(6;0)	0;6;0	3分の2	×	競技会のために結成;地元の祭りに参加;小学校で指導している	13
21人(18;3)	0;12;9	ほぼ全員志賀町	○	小中学生の指導をしている	14
16人(16;0)	0;15;1	全員	○	—	15
16人(16;0)	0;5;11	全員	○	地元の祭りでは、メンバー以外の人々も太鼓を叩く	16
27人(20;7)	17;10;0	全員鶴浦(大人)	×	メンバーは全員鶴浦町在住;子供メンバーは2つの小学校校区	17
14人(14;0)	1;7;6	全員	—	小学校で指導している	18
18人(13;5)	9;9;0	全員石崎町	○	—	19
9人(9;0)	0;9;0	全員石崎町	—	元来は青年団の太鼓だったが、絶やさないために結成した	20
12人(11;1)	0;5;6	全員	—	地区の太鼓打ちから教わったのをきっかけに結成した	21
7人(7;0)	—	—	×	地元の祭りでも叩く	22
22人(20;2)	0;3;19	全員七尾市	○	七尾市無形民俗文化遺産;学校は以来にに応じて指導	23
15人(15;0)	0;15;0	ほぼ七尾徳田	×	—	24
10人(10;0)	2;8;0	約半数	—	競技会と全国青年大会での好成績を目指す	25
11人(7;4)	11;0;0	全員	○	七尾豊年太鼓(23)から太鼓を教わった	26
11人(8;3)	3;3;5	全員七尾市	×	七尾豊年太鼓(23)から太鼓を教わった	27
10人(10;0)	0;4;6	ほぼ全員越蘇町	×	地域の太鼓復活のために近隣チームに教わったのがきっかけ	28
12人(12;0)	0;12;0	ほぼ全員町内	—	地元の祭りを復活させるために結成;小学生を指導している	29
18人(14;4)	0;3;15	ほぼ全員	○	中学生を指導している	30
22人(9;13)	6;13;3	全員旧鹿西町	○	平成9年に全国青年大会最優秀賞を受賞;小学生指導	31
9人(2;7)	9;0;0	全員羽咋市	—	祭りの太鼓を子供たちに教えるために結成	32
10人(7;3)	0;3;7	大半が柳田	×	—	33
8人(8;0)	0;5;3	全員	—	隣町のチーム結成に刺激されて結成した	34

次に、グループの結成年を見てみると、(次にみる七尾豊年太鼓などの一部の例外を除けば) 1970 年前後に結成された数グループをはじめとして、2000 年代にいたるまでコンスタントにグループができていくことがわかる。これに関連して、奥能登の鬼面太鼓のメンバーと比べると、メンバーの年齢が若い。データのあるもののみで比べると、成人のうち 50 歳以上の割合が、奥能登の鬼面太鼓タイプでは半数近い (126 人中 52 人) のに対して、口能登の競技会タイプでは約 4 分の 1 (309 人中 81 人) しかいない。また、グループの伝承や由来を保持しているのが 26 グループ中、半数以下の 12 にとどまるところからも、これらのグループが伝統文化からはある程度切り離されていることがうかがえる。実際、彼らの演奏の機会は、競技会をのぞくと、結婚式やイベントが主である。忙しいグループになると、年間で 40 回にもおよぶ演奏をこなしている。

奥能登の伝統的な太鼓のグループと比べると、練習が盛んなところも対照的である。26 ある競技会タイプのグループのうち、4 グループを除けば全てが週に 1 度以上練習を行っている (なかには香島津太鼓保存会 (19) のように、週に 3 回も練習しているところもある)。これには、競技会タイプのグループの多くが、伝統的な能登の太鼓を叩きながらも、創作組太鼓の練習を行っているという理由もあるようだ。

また、競技会タイプのグループでは、メンバーからがある程度の会費を集めるという点でも、奥能登にみられるグループと対照をなしている。奥能登の場合、鬼面太鼓タイプでは 14 グループ中わずか 3 つ、祭囃子タイプでは 16 グループ中の半数の 8 つしか会費を徴収しないのに対して、競技会タイプのグループでは、確認できるだけでも 26 あるうちの 19 グループが何らかのかたちで会費を徴収している。奥能登エリアの場合、祭囃子タイプの主な活動が地元の祭りだということが、会費が不要になる理由であろう。また、鬼面太鼓タイプは、そもそも出演料をとることを前提に結成され活動を始めたグループであった。競技会タイプの太鼓演奏でも出演料が発生することはあるらしいが、鬼面太鼓のグループがあくまで「セミプロ」の太鼓打ちなのに対して、口能登の競技会系グループの活動は、多分にアマチュア的である。

以上の特徴をまとめると、口能登の競技会タイプの太鼓グループはサークル活動に近いところがあり、そこが奥能登の鬼面太鼓や祭囃子タイプのグループと違うところなのである。ところで、「サークル活動的」という特徴は、次項以下で説明する「創作組太鼓」とも共通するところだが、実際のところ、競技会タイプは創作タイプとは決定的に異なっている。第一に、楽譜の有無である。本章で「創作組太鼓」と分類したグループのほとんどは、楽譜を利用して演奏を行っているのに対して、競技会タイプのグループが行う創作演奏は、楽譜に依らない場合が多い。第二に、両者のジェンダー志向の違いである。創作組太鼓タイプでは女性のためのグループがいくつかあるのだが、競技会タイプではそれは皆無であり、メンバーの男女の内訳をみても、ほとんどが男性によって占められている⁵。これは、競技会系のパフォーマンスで目標とされているものと、創作系の太鼓パフォー

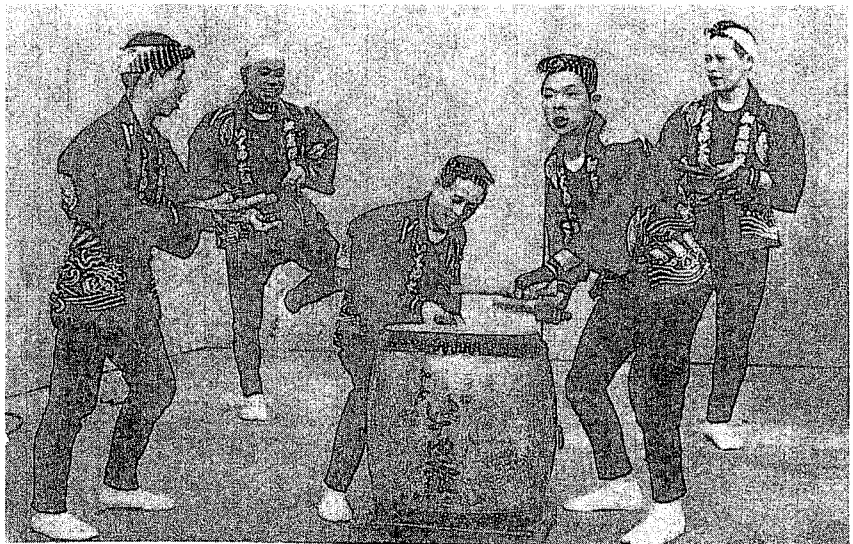
⁵ 表 2 では、この違いを確認するのは少し難しい。というのは、同じ競技会タイプであっても、子供のメンバーには女子がたくさんいるからである (瑞穂少年八幡太鼓 (2) や上熊野太鼓倶楽部 (4))

マンスで目指されているものだが、根本のところでは異なっていることを示唆している。

和倉の温泉太鼓

口能登エリアで特徴的な太鼓グループに、七尾市の和倉温泉で発達した「温泉太鼓」がある。実際のところ、この系統にあたるグループは、和倉いでゆ太鼓保存会（18）の唯一つなのだが、同じく「温泉太鼓」というジャンルに属する後述の「加賀太鼓」と共に、石川県の太鼓文化における重要性から、ここで簡単に取り上げる。

和倉いでゆ太鼓保存会は、この地域で「雨乞太鼓」と呼ばれる能登の太鼓を、七尾市の観光協会のすすめで温泉での演奏用にアレンジしたパフォーマンスを行う。和倉いでゆ太鼓保存会の活動の中心は温泉地ではあるが、その他のイベントや競技会にも出場していることから、表2では「競



技会タイプ」に分類している。しかし、結成年が 1945 年と

写真5 初期の和倉いでゆ太鼓
(七尾豊年太鼓保存会結成 50 周年記念誌『天鼓雷鳴』所収)

比較的早いことや、かなりはっきりとした伝承を保持しているところが、他の競技会タイプのグループとは異なっている。

3 金沢エリア

次に、金沢エリアの表3をみると、能登地方と比較して、圧倒的に「創作組太鼓」グループの数の多さが目立つ。金沢エリアの場合、38 グループ中の 30 ものグループが創作組太鼓として分類できるのである。また、伝統的な太鼓としては、津幡町や湯涌地区に、虫送りの太鼓のグループがいくつか見られる。

など)。今回のアンケートでは、成人の男女比が分かるようにはなっていないのだが、西島氏によると、口能登の競技会タイプのグループでは、女性はせいぜい 1 ～ 2 名から数名程度でしかない。

表3 金沢エリア

	グループ名	拠点	練習場所	演奏スタイル	由来	結成年	主な演奏の機会	会費	年間演奏回数	練習頻度
1	デンデコ太鼓保存会※	津幡町笠池ヶ原	公民館	虫送り太鼓	○	1963年	祭り、イベント	○	3回	本番前のみ
2	笠野子どもでんでこ太鼓塾※	津幡町山北	公民館	虫送り太鼓	○	2008年	イベント	×	10回	不定期[頻繁]
3	七黒大太鼓保存会※	津幡町七黒	七黒会館	虫送り+創作太鼓	×	1993年	祭り、イベント、慰問	×	5回	月2回
4	大神楽保存会※	津幡町九折	公民館	虫送り太鼓	×	1960年頃	イベント	×	3~4回	本番前のみ
5	朝霞太鼓	津幡町潟端	町営教育施設	創作組太鼓	×	1995年	イベント、慰問	○	12回	週1回
6	胡舞	内灘町鶴ヶ丘	小学校	創作組太鼓	×	2005年	イベント、ボランティア	○	8回	週1回
7	胡粹※	内灘町鶴ヶ丘	集会所	創作組太鼓	×	2006年	大会、イベント、慰問	○	6回	週1回
8	和太鼓 摩凜	内灘町鶴ヶ丘	公民館	創作組太鼓	×	2006年	イベント	○	20回	週1回
9	鼓月	内灘町向陽台	小学校	創作組太鼓	×	1999年	イベント	○	15回	週2回
10	Mahora	金沢市湊	メンバー自宅	創作組太鼓	×	2003年	イベント	○	—	週1回
11	壺中天	金沢市湖陽	幼稚園	創作組太鼓	×	1995年	イベント、結婚式	○	12~15回	週2回
12	大場潟乃太鼓	金沢市大場町	公民館	創作組太鼓	○	1949年	イベント、結婚式、慰問	×	30~40回	週2回
13	神隆太鼓	金沢市河原市町	小学校	創作組太鼓	×	1995年	イベント、祭り	○	15回	週2回
14	かみやち保育園児童クラブ※	金沢市神谷内	保育園	創作組太鼓	×	2005年	イベント、大会	○	2回	月3回
15	MAX 3	金沢市諸江上丁	小学校	創作組太鼓	×	1998年	イベント	○	5~6回	週1回
16	加賀豊年太鼓沖町保存会	金沢市沖町	中学校	鬼面太鼓	○	1955年	イベント、祭り	×	10回	週1回
17	もろえ夢太鼓※	金沢市諸江町	公民館	創作組太鼓	×	2004年	イベント、慰問	○	10回	月3回
18	西太鼓保存会	金沢市西念	公民館	創作組太鼓	×	2004年	イベント、ボランティア	○	8回	週1回
19	もっくり太鼓	金沢市畝田	公民館	創作組太鼓	×	1994年	イベント、ボランティア	○	10~15回	週1回
20	もっくり太鼓 瑞穂	金沢市畝田	公民館	創作組太鼓	×	2001年	イベント、大会	○	10~15回	週1回
21	静胡	金沢市藤江北	小学校	創作組太鼓	×	2006年	イベント、慰問、大会	○	6回	週1回
22	柿木太鼓※	金沢市柿木畠	市営施設	創作組太鼓	×	1994年	イベント、ボランティア	×	30回	週2回
23	友禅華太鼓	金沢市尾山町	小学校	創作組太鼓	×	1986年	イベント	○	10回	週1回
24	タテマチ大学和太鼓部※	金沢市片町	NPO施設	創作組太鼓	×	2008年	—	○	—	週1回
25	愛鼓会	金沢市上荒屋	小学校	創作組太鼓	×	2006年	イベント	○	—	月2回
26	押野校区少年連盟和太鼓教室※	金沢市八日市	小学校	創作組太鼓	×	2000年	イベント、大会	○	10回	週2回
27	和太鼓大地	金沢市横川	市営施設	創作組太鼓	×	1999年	イベント	○	20回	週1~2回
28	太鼓集団 竜	金沢市田上新町	スタジオ	創作組太鼓	×	2004年	イベント	○	3~4回	月3回
29	石川県立ろう学校 風神太鼓	金沢市窪	ろう学校	創作組太鼓	×	1997年	イベント、大会	×	4回	週2回
30	ゆずり葉	金沢市窪	市営施設	創作組太鼓	×	2000年	イベント、大会、コンサート	○	12回	週1回
31	有縁太鼓	金沢市窪	私営練習場	創作組太鼓	×	1995年	祭り、慰問	○	12回	週1回
32	銚子太鼓保存会	金沢市銚子町	公民館	創作組太鼓	○	1978年	イベント、祭り	○	10~15回	週1回
33	東浅野川ゆず太鼓	金沢市銚子町	公民館	創作組太鼓	×	2002年	イベント	○	5~6回	週1回
34	辰巳こんころ太鼓保存会	金沢市辰巳町	小学校	伝統風創作太鼓	○	1980年	イベント、祭り、慰問、結婚式	○	10回	月3回
35	北国打吹雪太鼓	金沢市四十万	メンバーの職場	創作組太鼓	×	1991年	イベントなど	○	20回	週1回
36	金沢市立芝原中学校和太鼓愛好会	金沢市湯涌	中学校	創作組太鼓	×	2005年以前	イベント、大会	×	6~7回	週1回
37	金沢百萬石太鼓	金沢市湯涌上原	小学校	虫送り太鼓	○	1972年	地元の祭り	×	3~4回	月3回
38	湯涌ちびっこどんどん	金沢市湯涌上原	小学校	虫送り太鼓	○	1997年	地元の祭り	×	3~4回	月3回

※印が付してあるのは石川県太鼓連盟に非加盟のグループ

メンバー数(男;女)	(20歳未満;20~49歳;50歳~)	地元在住者の割合	助成の有無	その他	
11人(10;1)	4;7;2	全員(笠池ヶ原)	○	津幡町指定無形文化財	1
45人(半々)	45;0;0	全員小学校校区	○	小学生のグループ	2
18人(16;2)	9;5;4	全員	○	—	3
7人(7;0)	0;0;7	全員九折	—	小学生を指導している	4
10人(3;7)	0;3;5	発足時は全員	○	町民の要望がきっかけで、町から助成を受けて結成;小学生を指導	5
7人(0;7)	0;5;2	ほぼ全員内灘	—	体験教室がきっかけで結成	6
8人(6;2)	8;0;0	全員内灘	—	小学生のグループ;指導者は「和太鼓 摩凜」のメンバー	7
5(0;5)	0;3;2	全員	×	体験教室がきっかけで結成;小中学校で指導している	8
9人(0;9)	0;8;1	内灘出身者=2名	×	地域の子供を指導している	9
3人(0;3)	0;1;2	もともと全員	—	公民館での太鼓教室がきっかけで結成;太鼓はすべて個人所有	10
10人(5;5)	0;7;3	全員	—	加賀や志賀の太鼓を教わっている;子供会で指導もしている	11
36人(13;23)	—(※子どもが36人中9人)	3分の1(大場)	○	結成後、宮本輝の「ふるさとのうた祭り」に出演した;小中学校で指導している	12
36人(18;18)	20;9;7	全員	○	イベントへの出演を目的に結成	13
9人(4;5)	9;0;0	全員	—	小学生のグループ	14
11人(6;5)	0;1;10	7人が金沢市	—	県太鼓連盟主催の太鼓教室がきっかけで結成;小学校で指導している	15
12人(9;3)	4;4;2	ほぼ全員	×	「源平魔よけ太鼓」という演目をステージで実演する;大阪万博に出演;中学校で指導	16
22人(7;15)	16;3;3	全員	○	子供のグループ;学校が週5日制になったことがきっかけで結成	17
8人(4;4)	0;3;5	ほぼ全員	—	—	18
10人(0;10)	0;3;7	全員	○	女性のためのグループ;メンバーは地域在住者のみ	19
8人(0;8)	8;0;0	全員	○	太鼓教室をきっかけに結成;地域出身の小学校~高校女子のグループ	20
6人(2;4)	6;0;0	—	—	小中学生のグループ;指導者は「和太鼓 摩凜」のメンバー	21
15(8;7)	0;12;3	なし	—	柿木畠商店街活性化のために結成	22
9人(0;9)	—	全員	×	—	23
5人(0;5)	—	全員金沢市	×	メンバーは「タテマチ大学」(NPO)の受講者;加賀太鼓と助六太鼓を叩く	24
6人(2;4)	0;5;1	全員(金沢市内)	○	県太鼓連盟の初心者太鼓教室がきっかけで結成;小学生を指導している	25
23人(14;9)	23;0;0	全員	○	和太鼓教室をきっかけに結成;小学生から高校生のグループ	26
10人(3;7)	1;2;8	ほぼ全員	×	県太鼓連盟の初心者教室がきっかけで結成	27
4人(2;2)	0;2;2	なし	×	—	28
16人(9;7)	16;0;0	全員	×	ろう学校の生徒たちのグループ;生徒たちの要望で結成	29
4人(0;4)	0;4;0	全員金沢市	○	幼稚園の親子太鼓サークル;2008年に米国で演奏	30
8人(2;6)	0;3;5	5名が金沢市	×	県外からもメンバーあり	31
9人(5;4)	0;5;4	ほぼ全員	×	村の有志が保存会をつくることで、グループとして結成した;小学生を指導している	32
16人(6;10)	16;0;0	75%	×	小学生のグループ	33
23人(23;0)	10;10;3	全員(辰巳町)	—	保存目的で結成;小学校で指導している	34
10人(2;8)	—(※全員大人)	ほぼ全員	○	助成が受けられたことをきっかけに結成;現在は活動休止	35
18人(15;3)	18;0;0	全員	—	中学生のグループ;和太鼓が授業の一環として組み込まれている	36
11人(11;0)	—	全員	○	地域の虫送り太鼓を絶やさないために結成;小中学校で指導している	37
—	—	—	—	子供のグループ;金沢百萬石太鼓(37)の指導	38

創作組太鼓

本章で「創作組太鼓」というのは、1970年代から国内外で注目を集めた太鼓演奏集団、すなわち小に大八の「御諏訪太鼓」や「鬼太鼓座」といったグループによって開拓された、ごく新しい太鼓の演奏スタイルのことである。創作組太鼓は、複数の太鼓を何人もの演奏者がアンサンブルで演奏する。能登エリアでみた太鼓と比べたときの根本的な違いは、創作太鼓では楽譜に記された「曲」の演奏が基本になっている点だろう。

一般の市民にこのスタイルの太鼓演奏が広まったのは、1988年から1989年にかけて当時の竹下内閣政権下の「ふるさと創生事業」によってだったといわれている。実際に表3をみても、それ以前に結成された創作組太鼓のグループは、わずかに3グループである（大場潟野太鼓（12）、友禅花太鼓（23）、銚子太鼓保存会（32））。これらの全てのグループが現在も行政や民間の助成を受けているわけではないが、助成の有無についての質問に対して明確に回答した20チームのうち、何らかの助成金を受け取っているグループは、半数の10チームであった。ただでさえ高価な太鼓を何台も使用するこの種のグループでは、多額の運営費用が必要なのである。

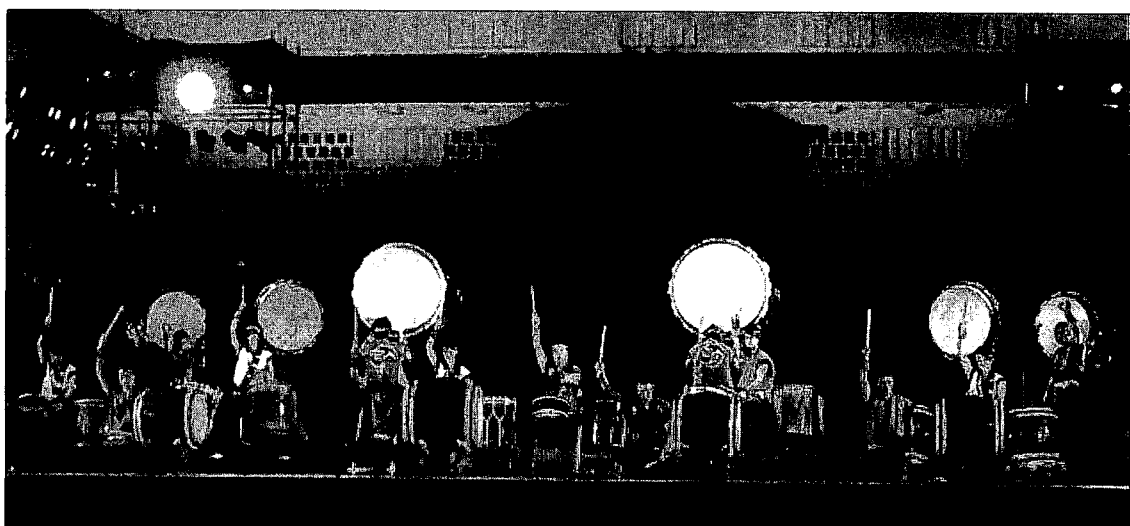


写真6 創作組太鼓の一例、大場潟乃太鼓（提供：大場潟乃太鼓）

創作組太鼓のグループは、いわゆるサークル活動的な側面が強い。ほとんどのグループが週に1度かそれ以上の練習を行い、グループは会費（および時折支払われる出演費）によって運営されている（会費のないグループは、30中でわずかに4つのみ）。出演する機会は、地元のイベントや老健施設でのボランティア演奏が多い。また、太鼓連盟などで行われるコンクールへの出場が占める割合も、一定程度あるようだ。

多くは、地域や村落の伝統から切り離されており、そのことは練習場所に小中学校が多く見られることに反映されている。同様の傾向は、こちらの「メンバーの地元出身者の割合はどれくらいか」という質問に対する答えにも見出すことができる。奥能登エリアの人々にとって「地元」が集落を

指す場合が主だったのに対し、金沢エリアで「地元」と言うとき、それは校区レベルの広がりをもつことが多く、時には市町村レベルの地域を指す場合も少なくなかった。

この村落的な伝統との距離は、メンバーとの男女比からも読み取れる。金沢エリアで創作組太鼓の категорияに当てはまるグループに所属する総人数のうち、実に6割以上を女性が占めているのである（351人中215人）。そればかりか、女性のみで構成されたグループが、30グループ中9つにもおよぶ。これらの多くは、男性中心の既存の太鼓文化を強く意識して、意図的に女性だけのグループを結成している。

津幡町の虫送り太鼓

夏場の害虫駆除のために田で行われる「虫送り」の行事は、ここでいう金沢エリアや石川県に限らず、日本全国にみられるものである。今回の調査では、金沢エリアで津幡町と湯涌地区の虫送り太鼓グループの情報が得られたが、このうち津幡町に関しては、平成元年に津幡町教育委員会および社会教育課によって行われた広域調査の資料が利用できるもので、その資料をもとに若干の説明を行う。

津幡町の虫送り太鼓の出番は、なにも虫送り行事にのみ限られるのではなく、祭りや神社の落慶法要、盆踊りや敬老会でも演奏されるものだった。津幡町が平成元年に行った、虫送りの存続に関する広域調査の結果からは、次のようなことが明らかになっている。江戸時代の後期から戦前にかけては、津幡町のほぼ全域で虫送り行事が行われており、その多くは長桶胴太鼓を使用していた。

このことは、多くの地区で太鼓が残っていることから明らかである。戦後間もない頃から昭和35（1960）年ごろまでの間に、大半の地区で途絶えてしまったというが、その原因は、農薬の普及、世話役の青年団の人不足、そして住宅化や農地整備による環境の変化である。

津幡町では、ほぼ途絶えることなく虫送り太鼓を保存してきた地区が、分かっているだけでも2つある。ひとつは、笠池ヶ原のデンドコ太鼓保存会（1）で、1963（昭和38）年に津幡町の無形文化財に指定されている（そのため、維持のための補助金が支給されている）。津幡町の虫送りのなかでも、デンドコ太鼓には（面白いことに虫送り行事とは無関連の）ユニークな伝承があり、それは次のようなものである。——約600年前、蓮如上人が布教のために北陸に5年ほど滞在していた。



写真7 津幡のデンドコ太鼓
（北國新聞記事より）

その時、笠池という集落に立ち寄り、村人に話をしようとしたが、村人は話を聞かなかった。そこで蓮如上人が「出てこい出てこい」と太鼓を叩くと、村人が出てきて話を聞くようになり、浄土真宗が広まった。蓮如上人が村を去る時には、村人が別れを惜しんで、蓮如上人の太鼓をまねて太鼓を叩いた。——この「出てこい出てこい」のリズムが「デンドコ、デンドコ」の元になっているのだという。

もうひとつは、東荒屋および萩野台の虫送り太鼓であるが、この活動については今年の『太鼓まっぷ』用の調査時には、情報を得ることができなかった。虫送り太鼓の存続をさらに確かなものとして考えた東荒屋の人々は、2010年に新たに「萩野台太鼓振興会」を設立した。萩野台とは、東荒屋を含む小学校の校区であり、これにより担い手の拡大を狙ったというわけである。周辺の集落では1960年頃に虫送り太鼓は途絶えていたため、「東荒屋の虫送り太鼓」を「萩野台地区の虫送り太鼓」として再構成することは、周辺集落にとっては「復活」の意味をもった。

4 加賀エリア

最後に加賀エリア（表4）である。加賀エリアも金沢エリアと同じく、創作組太鼓のグループが圧倒的に多く、45グループ中35グループを占めている。その他には、これも金沢エリアとおなじ虫送り太鼓のグループがいくつかあることと、「加賀太鼓」と呼ばれる、小松市や加賀市の温泉地帯に独自に発達した太鼓文化があることである。創作太鼓については、金沢エリアと同様の特徴といえるのでここでは繰り返すことをせず、以下では、野々市町周辺の虫送り太鼓と加賀太鼓についてのみ説明しよう。

横江町周辺の虫送り太鼓

まずことわっておかなければならないのは、ここで取り上げる横江町周辺の虫送り太鼓については、『太鼓まっぷ』の調査では我々の調査の手が届かなかったということである。（白山市（旧松任市）横江の虫送りが市指定の無形民俗文化財であることを知ったのは、不覚にも『太鼓まっぷ』の調査終了後のことであった）。したがって、表4ではこれらの保存会その他の情報は載せていないのだが、ここで簡単に述べることにしよう。

横江の虫送りは、1964（昭和39）年に、当時の松任市の無形民俗文化財に指定されている。いつごろから始まったかは定かではないが、300年ほど続いていると言われている。この地域では、他にも昔から虫送りが盛んで、現在でもいくつか残っている。それらの地区の虫送りは、7月20日前後に行われる。打ち鳴らされる長桶胴太鼓を先頭に、松明などをかざした子供がそれに続いて行列を作るといのが、一般的な形態らしい。村の田んぼを練り歩いた後に、神社や空き地などで予め備えておいたかがり火の周りで、太鼓を打ち鳴らす（写真8）。田の周りをねり歩く時から、周辺集落の太鼓が合流し、広場での太鼓演奏も合同で行われるという。

虫送りとその太鼓演奏は、各集落の青年団によって行われる。青年団は、バチの制作や、火縄お

よび松明づくりを担当する。太鼓の練習は、各地区で半月ほど前から行われる。特に力がいれられるのは、「虫送（り）」と書かれたかがり火（写真9）の制作だというが、これは一部の地区で明治30年頃から始まった新しい演出である⁶。こうした工夫からは、横江町周辺の虫送り行事が近代化のなかである程度の変化を続けてきたことがうかがえる。実際、野々市町のある地区では、従来型の虫送りが衰退した代わりに、各家々の玄関先で太鼓演奏を披露しご祝儀をもらおうという新しい形式の虫送りもある⁷。



写真8（左） 富奥地区の虫送り太鼓（DVD『映像で見る野々市町の民俗』より）

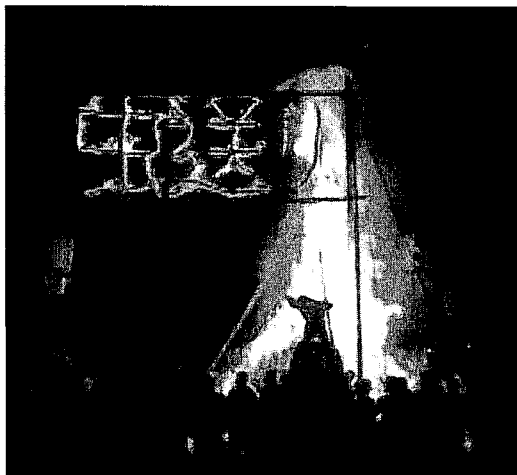


写真9（右） 富奥地区の虫送りのかがり火（同上）

加賀の温泉太鼓

加賀エリアに7グループ見られる「加賀太鼓」とは、小松市や加賀市の温泉で発達した演奏スタイルのことである。創作組太鼓のグループが1990年代から現在までの間に結成されているのとは対照的に、加賀太鼓のグループはそのほとんど（7グループ中5つ）が1990年より以前に結成されている。加賀太鼓がこの地域で比較的古くからあったことは、ここからも分かるだろう。



写真10 加賀太鼓の演奏
（提供：釜見谷太鼓）

⁶ 石川県教育委員会編『石川の祭り・行事：石川県祭り・行事調査事業報告書』（1999年），p.154。

⁷ 野々市町史編纂専門委員会『野々市町史：民俗と暮らしの事典』（2006年），p.239。

表4 加賀エリア

	グループ名	拠点	練習場所	演奏スタイル	由来	結成年	主な演奏の機会	会費	年間演奏回数	練習頻度
1	富樫太鼓	野々市町御経塚	市営施設	創作組太鼓	×	1994年	イベント	○	4回	週1回
2	ののっこ太鼓小嵐※	野々市町本町	小学校	創作組太鼓	×	2001年	イベント、大会、慰問	○	8回	週1回
3	藍	野々市町堀内	自宅や公園	創作組太鼓	×	1996年	イベント、慰問	×	100回	週1～2回
4	石川県立明和養護学校和太鼓部 龍剣太鼓※	野々市町中林	体育館	創作組太鼓	×	2009年	—	○	—	週2回
5	出城虫送り太鼓保存会	白山市成町	公民館	創作組太鼓	×	2002年	イベント、慰問	○	12回	週1回
6	笠間弓堀太鼓	白山市笠間町	浜風舎(?)	創作組太鼓	×	1994年	イベント、祭り、慰問	×	15～20回	週1回
7	あんず太鼓※	白山市平加町	市営文化会館	創作組太鼓	×	2000年	イベント	○	2～3回	月2回
8	はつらつ太鼓※	白山市平加町	市営文化会館	創作組太鼓	×	2000年	イベント	×	2～3回	月1回
9	美川あっ晴太鼓※	白山市美川北町	市営文化会館	創作組太鼓	×	2002年頃	—	○	5～6回	週1～2回
10	美川ちびっ子和太鼓※	白山市美川中町	市営文化会館	創作組太鼓	×	1997年	イベント、大会	○	4回	週1～2回
11	炎太鼓	白山市福留町	浅野太鼓	創作組太鼓	×	1992年	イベント	—	—	—
12	緑光	白山市福留町	浅野太鼓	創作組太鼓	×	1992年	イベント	—	—	—
13	福留じょんから太鼓 龍青	白山市水澄町	浅野太鼓	創作組太鼓	×	1985年	イベント、大会	○	15～20回	週1回
14	和太鼓グループ サスケ	白山市四ツ屋町	浅野太鼓	創作組太鼓	×	2002年	イベント、コンサート	○	10回	週1回
15	山王国土太鼓※	白山市新成	会社倉庫	鬼面太鼓+キリコ太鼓	○	2001年	イベント	×	2～3回	本番前のみ
16	白嶺太鼓同好会	白山市熱野町	メンバーの職場	創作組太鼓	×	1992年	イベント、慰問	×	3回	週1回
17	和太鼓 翔	白山市七原町	市営施設	創作組太鼓	×	2001年	イベント、祭り	○	20回	週1回
18	若原明神太鼓	白山市若原町	集会所	創作組太鼓	○	1990年	イベント	×	10回	週1回
19	城山太鼓保存会	白山市別宮町	町内施設	伝統風創作太鼓	○	1978年	祭り、イベント	○	6～8回	週1回
20	高倉太鼓※	白山市市原	公民館	創作組太鼓	×	1985年頃	イベント、慰問	○	4～5回	週1回
21	手取亢龍太鼓保存会	川北町字朝日	町営武道館	創作組太鼓	×	1990年	イベント	○	2回	週2回
22	ねあがり太鼓 響	能美市赤井町	市営文化会館	創作組太鼓	×	1996年	イベント	○	5回	週2回
23	西大御太鼓※	能美市西任田	市営体育館	創作組太鼓	×	1994年	イベント、祭り	○	3回	週1回
24	中庄虫送り太鼓保存会	能美市中庄町	公民館	創作組太鼓	○	1996年	イベント	○	5～6回	週2回
25	ゴジラ太鼓山口活喜会※	能美市山口町	公民館	創作組太鼓	○	1993年	イベント、慰問、結婚式	○	5回	週1回
26	下ノ江こだま太鼓	能美市下ノ江町	公民館	創作組太鼓	×	1991年	イベント、慰問	○	10回	週1回
27	チビっ子九谷太鼓	能美市佐野町	小学校	創作組太鼓	×	1981年	祭り、イベント	○	10回	週1回
28	石川県九谷太鼓保存会	能美市牛島町	市営体育館	創作組太鼓	×	1970年	祭りなど	○	5～6回	週3回
29	無限※	小松市園町	市営体育館	加賀太鼓	×	2005年	イベント、祭り、慰問	○	7回	週1回
30	小松原大太鼓保存会	小松市園町	公民館	加賀太鼓	○	1982年	イベント	○	6回	週1回
31	しぶき※	小松市打越町	市営体育館	創作組太鼓	×	1998年	祭り、慰問、イベント	○	4回	週1回
32	釜見谷太鼓※	小松市吉竹町	町内の神社	加賀太鼓	×	1980年	祭り、慰問、結婚式	○	7～8回	週1回
33	打族(Da-zoku)	小松市吉竹町	体育館	創作組太鼓	×	1994年	イベント、祭り、慰問	○	20回	週2回
34	環海	小松市北浅野町	市営体育館	創作組太鼓	×	1994年	イベント、結婚式、慰問	○	8回	週2回
35	加賀三湖太鼓※	小松市今江町	市営体育館	加賀太鼓	○	1980年頃	慰問、結婚式	○	5回	週1回
36	九思龍神太鼓※	小松市串町	公民館	虫送り太鼓	○	1991年	祭り、イベント、慰問	○	3回	週1回
37	常盤太鼓	小松市串町	—	加賀太鼓	×	1975年頃	結婚式など	×	7～8回	練習しない
38	常盤太鼓 波動※	小松市串町	温泉ほか	創作組太鼓	×	2002年	イベント、祭り	○	20～30回	週1回
39	加賀太鼓守護神※	小松市蓮代寺町	メンバーの職場	加賀太鼓	×	2003年	慰問、イベント、祭り	○	7～8回	週2回
40	洞月太鼓※	小松市金平町	福祉施設	創作組太鼓	×	2000年	イベント、慰問	○	6～7回	週1回
41	加賀太鼓保存会	小松市栗津町	個人教習所	加賀太鼓	×	1970年	イベント、結婚式	×	—	週1回
42	和太鼓OTOSoundTHEおとKids※	小松市林町	個人道場	創作組太鼓	×	2009年	大会	○	—	週1回
43	和太鼓OTOSound※	小松市林町	個人道場	創作組太鼓	×	2008年	イベント中心	○	15回	週1回
44	加賀助六太鼓※	小松市林町	個人道場	創作組太鼓	×	2008年	イベント	○	30回	週3回以上
45	南陽園太鼓倶楽部	加賀市潮津町	福祉施設	創作組太鼓	×	2000年	イベント、大会	○	2～3回	週1回

※印が付してあるのは石川県太鼓連盟に非加盟のグループ

人数(男;女)	20歳未満;20～49歳;50歳～(人)	地元在住者の割合	助成の有無	その他	
7人(4;3)	0;1;6	ゼロ	—	商工会の太鼓講習会がきっかけで結成;地元在住者はいない	1
25人(11;14)	25;0;0	全員野々市町	○	小学生のグループ;指導者は「藍(加賀3)」のメンバー	2
4人(0;4)	—	ゼロ	×	セミプロ的グループ;小学校で指導もしている	3
6人(5;1)	6;0;0	全員	—	養護学校の学生グループ;学校のスタッフに和太鼓経験者がいたことがきっかけで結成	4
26人(—)	13;13;0	全員	○	「松任まつり」に参加するためにグループを結成	5
16人(5;11)	0;11;5	半数強が笠間町	○	ほぼ全員が白山市在住;郷土芸能伝承と福祉ボランティア促進のために結成	6
10人(4;6)	3;4;3	全員旧美川町	○	障害者(作業所「あんずの家」)のグループ	7
11人(1;10)	0;8;3	全員旧美川町	×	作業所利用者とその親のグループ	8
16人(4;12)	0;6;10	全員旧美川町	×	1年間の生涯学習教室をきっかけに結成	9
8人(3;5)	8;0;0	全員旧美川町	○	生涯学習講座がきっかけで結成	10
—	—	—	—	浅野太鼓文化研究所/楽器店所属のグループ	11
—	—	—	—	浅野太鼓文化研究所/楽器店所属のグループ;メンバーは学生	12
10人(3;7)	8;2;0	全員(小学校校区)	×	子どものグループとして発足したが、現在では大人も所属	13
9人(5;4)	9;0;0	全員	—	—	14
6人(6;0)	0;6;0	3分の1	○	珠洲出身者がメンバーを集めて発足させた	15
15人(12;3)	0;15;0	ほぼ全員	×	企業の同好会	16
10人(6;4)	5;3;2	2名のみ	×	炎太鼓(加賀11)の太鼓講座がきっかけで結成;金沢在住メンバーが多い;小学生も指導	17
17人(11;6)	11;4;2	全員(町内)	○	ふるさと創生事業がきっかけで結成;集落の子供全員に習わせている;指導者は福井県在住	18
40人(25;15)	25;12;3	半分弱が別宮町	×	集落の有志が保存会を結成;現在は集落の外にもメンバーがいる;子供も指導している	19
12人(6;6)	6;5;1	全員旧吉野谷村	×	公民館での太鼓教室がきっかけで結成;虫送り太鼓を復活させ、現在は組太鼓も行	20
34人(14;20)	19;15;0	ほぼ全員	○	ふるさと創生事業がきっかけで結成	21
12人(6;6)	0;11;1	8割	—	旧根上町の生涯学習がきっかけで結成	22
7人(1;6)	0;1;6	全員	×	現在は脱退している設立時のリーダーが、加賀太鼓の名手	23
28人(14;14)	—(※28人子どもは15人)	全員	○	最近地域の虫送りを復活させた	24
10人(7;3)	0;1;9	7名能美市	—	—	25
11人(3;8)	0;6;5	全員	○	虫送りや加賀太鼓を基本にした創作太鼓	26
21人(3;18)	21;0;0	全員	—	学童保育で活動を開始;それを見聞きた人々も加わり、現在にいたる	27
38人(24;14)	—(※全員大人)	全員能美市と小松市	×	地域の虫送り太鼓を、九谷焼のPRをかねてグループとして結成したもの;子どもの指導もしている	28
4人(4;0)	0;0;3	全員	—	「打族(加賀33)」のメンバーが伝統回帰を目的に始めた	29
11人(7;4)	0;4;7	全員	×	生涯学習の一環として結成	30
8人(5;3)	0;8;0	全員	—	「小松大太鼓(加賀30)」のメンバーが独自に人を集めて結成	31
8人(6;2)	0;6;2	全員町内	—	テレビ番組の寸劇に太鼓を組み込んだのが結成のきっかけ	32
11人(8;3)	3;7;1	全員小松市	×	セミプロ的チーム;町内の太鼓からはじめて、さらに上をめざしメンバーを集めた	33
9人(3;6)	1;4;4	全員小松市	×	メンバーは近所同士ではない	34
7人(5;2)	0;2;5	全員	—	今江町の「三湖太鼓保存会」として発足;現在は今江町以外の住民と一緒に加賀太鼓を叩いている	35
12人(7;2)	0;2;10	全員串町周辺	○	途絶えた地域の虫送りの復活	36
10人(9;1)	1;1;8	全員小松市	×	—	37
9人(1;8)	4;4;1	全員	—	栗津にあるある小学校の卒業生で結成	38
7人(6;1)	0;2;5	全員小松市	×	代表者はプロの太鼓打ち;加賀太鼓を絶やしたくないとの気持ちからグループを結成	39
15人(9;6)	0;14;1	全員小松市と能美市	—	知的障害者のグループ	40
7人(7;0)	0;0;7	ほぼ全員	○	集落ベースの温泉太鼓が「加賀太鼓」として結集;多数のグループを排出している	41
10人(6;4)	10;0;0	全員	×	道場は指導者所有	42
80人(20;60)	22;47;11	—(県内各地より)	×	指導者は上(加賀42)と同じ	43
8人(3;5)	0;8;0	小松市中心	×	リーダーは和太鼓OTOsound(加賀43)の指導者;ギターなどと共演する、プロを目指すグループ	44
18人(12;6)	2;16;0	ほぼ全員加賀市	—	障害者のチーム	45

加賀太鼓のルーツは、虫送り太鼓や小松市にあった「祝い太鼓」であると言われる。戦後間もない頃に温泉を訪れる観光客向けに演奏するようになって、現在の形になった。すなわち、足袋、鉢巻き、はっぴなどを着て、大太鼓（桶胴太鼓）と長胴太鼓を二人一組の「大バイ、小バイ」が、笛に合わせて演奏するというスタイルである。時期的には、御陣乗太鼓や和倉の温泉太鼓よりも、もう少し早くに成立している。当時を知る演奏家が 1960 年代後半から 1970 年代前半にかけて書いたと思われる、『鼓道』と題された手書きの記録によると、昭和 25 年から昭和 32 年にかけて、3 つほどの太鼓演奏団体が結成されている。

温泉で活躍する加賀太鼓の演奏者は、一時期は 100 名ほどいたが、現在はその半数程度になったという。ただし、加賀太鼓の演奏スタイルは、アマチュアの太鼓愛好家の間にも広まっているところが特徴的である。たとえば、無限（29）や小松原大太鼓保存会（30）、釜見谷太鼓（32）など、表 4 で「加賀太鼓」と分類したグループのほとんどは、アマチュアの演奏家集団である。また、分類上「創作組太鼓」としたグループのなかにも、活動のなかに加賀太鼓を取り入れているグループは少なくない。あざやかな技巧をおりませた叩き方であるため、太鼓愛好家としても学びたいという気持ちをくすぐられるのかもしれない。また、戦後生まれの芸能というだけあって、加賀太鼓の演奏の機会は、地元の祭礼よりは、イベントや慰問、結婚式が主である。

Ⅲ 類型化の試み

前節では、石川県の太鼓スタイルを、地域ごとと特色と結び付けて分類してみた。それに対して本節では、「身体的パフォーマンス」という見地から、石川県で見られる多様な太鼓文化の簡単な類型化を試みる。

現在の石川県で見られる太鼓には、地元の祭礼に密着した（埋め込まれた）ものから、全国的な広がりを見せる「和太鼓ブーム」の一部となっているものまで、かなり多様なスタイルがある。ここでまず想定できるのは、各々の演奏スタイルにはそれらが成立した社会的背景が深く刻まれているだろうということである。たとえば、地域の祭りに埋め込まれた太鼓演奏であっても、その成立時期やその他の背景によっては、多様性が生まれる可能性がある。観客に見せるための「芸能」として発達したスタイルであっても、同じことが言えるであろう。つまりここで念頭に置いているのは、各々の演奏スタイルが成立した歴史的・社会的経緯と、パフォーマンス空間との関連である。

以下では、石川県の太鼓スタイルからいくつかの例を選び出し、それらの演奏スタイルと社会的文脈との関連づけを行ってみようと思う。それにより、石川の太鼓文化の多様性と重層性を、単に地域的な色分け以上に豊かに示しうるだろう。と同時に、この作業が目指すのは、土着的な民俗芸能が近代のなかで、いかにその姿を変え社会的な環境に適応するのかという動的な過程を把握するための、手がかりを提供することである。

本節で筆者が念頭に置いているモデルは、次のようなごく単純なものである。まず第一に、現在

みられる太鼓芸能には、いわゆる「プロトタイプ」を想定できる。キリコ祭りにおける太鼓や虫送りの太鼓といった、伝統的な儀礼に埋め込まれた太鼓演奏がこれにあたる。第二に、ひとつの集落や地区という枠組みを越えた場で演奏される太鼓がある。能登地方にみられる「県下太鼓打競技会」などがその典型である。第三に、地元の住民が外部から訪れる観光客などに見せるためにできた演奏スタイルがある。和倉や加賀にみられる温泉太鼓がそれである。第四に、ステージの上で見せることを前提としたタイプの民俗芸能があり、代表として奥能登の鬼面太鼓がある。最後が創作の太鼓であり、これは具体的な民俗のイメージというよりは、より一般的な「ジャパネスク」な演出に特徴づけられている。

もう少し一般的な言い方をすると、上のモデルは、太鼓パフォーマンスが誰に向けられているかということに着目し、その向かう先の広がり of 小さなものから順に並べたものである。ここで仮定しているのは、集落の儀礼の中で行われる演奏であれば、地元住民同士の輪のなかにおさまるだけの身体表現を伴うだろうが、その輪が大きくなるにつれて、身体表現も変化するだろうというものである。

1 儀礼に埋め込まれた太鼓——キリコ太鼓と津幡町の虫送り太鼓

まずは、地元の祭事や神事に埋め込まれた太鼓である。太鼓が使用される儀礼といえ、数に限りがなくあげられるが、ここでは次項から説明する太鼓スタイルの成立に直接的な影響をあたえたと思えるもののうち、現在もある程度残っているものをあげる。つまり、ここであげる太鼓は、後に続く演奏スタイルのプロトタイプとして想定できるというわけである。他のパフォーマンスのタイプと比べた大きな違いは、特別に誰かに見せるための太鼓、「見せる芸能」としての太鼓の側面が、かなり薄いということである。

この種の太鼓の典型は、奥能登のキリコ太鼓であろう。多くのキリコ祭りでは、キリコが村のなかをねり歩く際と、キリコが（門付けや神事のために）停止している際に、異なる太鼓演奏が行われる。前者ではゆったりとしたリズムの笛や鉦に合わせて、太鼓もあまり拍節でない演奏が行われる。後者の方がいわゆる「キリコ太鼓」と呼ばれる演奏スタイルで、ここでは小バイの規則正しいリズム（地打ち）に合わせて大バイが加わるという、前節で述べた「能登の太鼓」に共通するものである。筆者はごくわずかの祭りもしくは太鼓演奏の練習を見たにすぎないが、その経験によれば、どちらも比較的短いフレーズの繰り返しであり、「音楽」としての輪郭のはっきりしないものであった。

筆者が訪れたことのある輪島市名舟のキリコ祭りの場合、神事が行われている最中に集落中から5基のキリコが神社の境内に集まり、それぞれのキリコにぶら下げられた平太鼓がてんでばらばらに打ち鳴らされていた。なかには名手もいたが、大半はさして練習もしていないという演奏で、子供たちの演奏となると大人のそれと比べて明らかに稚拙であった。下手な人間でも、祭りの雰囲気にならされて叩くことができるというのが、キリコ太鼓の特徴なのである。

津幡町の虫送り太鼓も、このタイプに当てはまるといえる。ただし、津幡の虫送り太鼓では、笛のメロディが大きな役割を果たすことや、「デンデコ太鼓」や「大神楽」といった曲目がある程度はつきりしているところが違う。つまり、キリコ太鼓に比べてより「音楽」的なのである。また、虫送り太鼓のパフォーマンスは、過去にも敬老会などで披露されていたというから、次に見るような儀礼の文脈から離脱する方向をすでにもっていたといえる。この点はまだ確かめられていないのだが、キリコ太鼓と比べて演奏の専門性はやや高いとみることができそうだ。

また、このカテゴリーに当てはまる演奏スタイルの特徴として、叩き方の多様性も指摘しておきたい。たとえば、キリコ太鼓の叩き方は、二人一組で大バイと小バイの組み合わせという、次項でみる競技会タイプの太鼓演奏と基本的に同じである。ところが、競技会の太鼓演奏が数えられるほどのいくつかのパターンに収斂して来たように思われるのと異なり、奥能登のキリコ太鼓は、集落ごとの叩き方のパターンが明確に異なっているのだという。似たようなことは、津幡の虫送り太鼓でもいえる。津幡町教育委員会による調査によると、虫送り太鼓の演奏パターン（これには、太鼓だけでなく笛のメロディなども含まれるのだが）にも集落ごとの差異が認められた。

2 地元住民同士の腕比べとしての太鼓——県下太鼓打競技会など

プロトタイプの次に想定できるのは、儀礼のなかに埋め込まれていたものが「太鼓の演奏」として独自に分立する段階である。この典型と思えるのが、超集落的な競争というコンテキストにおける太鼓パフォーマンス、すなわち能登地方の「県下太鼓打競技会」における、住民同士の「腕比べ」の側面の強いパフォーマンスである。もちろん、競技会が始まって初めて、太鼓パフォーマンスに競い合いの要素が生まれたと考えるのは、単純にすぎるだろう。現在でもキリコ祭りを見ると、腕に覚えのある者が自信たっぷりに太鼓を叩く姿が見られるし、そもそも太鼓の演奏に腕比べの要素がなければ、競技会も生まれなかったはずだからである。だが、この段階になってはじめて現われると思える身体的なパフォーマンスの要素もあるのだ。

県下太鼓打競技会（以下「競技会」と記す）は、昭和初期（戦前）に志賀町の小浜神社で始まり、その後輪島や七尾でも行われている⁸。競技会では、能登半島全域から腕に覚えのある太鼓打ちたちが集まり、優勝タイトルである「大関」の地位を目指して競演する。パフォーマンスのスタイル自体は、キリコ太鼓と基本的には同じ「能登の太鼓」なのだが、競技会での太鼓パフォーマンスは明らかに「見せる（魅せる）」要素が強い。

まず、ほとんどの演奏は1分弱から2分ほどの間に収められているところが違う。その間、見物人は壇上のパフォーマンスをしかと見届けるといわけである。また、その短い間で競う太鼓の音

⁸ 浅野太鼓楽器店社主の浅野義幸氏によると、かつては金沢や加賀でも太鼓打競技会が行われていた。開始時期は不明だが、浅野氏の記憶によれば、開催されなくなったのは昭和40年代だという。金沢では能登と同じく1つの長胴太鼓を2人が打つという決まりだったが、加賀では加賀太鼓のスタイル、すなわち桶胴の大太鼓と長胴太鼓が1つずつ用いられていた。

量も、キリコ太鼓と比べるとずっと大きい。さらに、太鼓を叩かない合間の腕さばきや足さばきといった所作や、演奏中の楽しそうな笑顔なども、見せるパフォーマンスならではのものである。とはいえ、このパフォーマンスの面白さをわかるには、少なくともある程度はこのタイプの太鼓を見慣れていることが必要であるし、最も熱心な観客は自らも演奏する太鼓打ちである。そこが次項の「舞台上の民俗芸能」と違うところだろう。

ところで、このタイプとしては、横江周辺の虫送りも入れられるかもしれない。というのも、横江周辺の虫送りは周辺集落が合同で行い、太鼓の演奏も、複数の集落が一堂に会して行うからである。筆者は、この虫送り行事を実際に見ていないので、確かなことは言えないが、この地域では「太鼓を叩けてはじめて一人前」と言われるところをみると、複数の地区が合同で行う祭り行事が、「腕比べ」の場を形作っている可能性はあると考えられる。

3 地元で見せる民俗芸能としての太鼓——七尾や加賀の温泉太鼓

超集落的な競争というコンテクストの次は、地域の外部からやってきた人々に見せるという場である。この段階になると、地元の芸能についての経験や知識をもたない人が、「観客」として想定されることになる。それに合わせて、先の2つのタイプと比べると「技」の洗練が進むということになる。石川県の太鼓文化でこれに当てはまるのは、加賀の温泉地で発達した「加賀太鼓」と、和倉の温泉太鼓である。

どちらも基本的には「大パイ、小パイ」の太鼓であるが、力いっぱい打ちこむというよりは「巧さ」がポイントである。加賀太鼓は虫送りがベースであり、横笛のメロディに合わせて、大パイが桶胴の大太鼓と長胴太鼓の2種類の太鼓を叩く。この複数の太鼓を見事なバチさばきで交互に打つ技巧が、一番の見せどころといえそうである。加賀太鼓で特徴的なのは、このバチさばきが見る側に「自分もやってみたい」という気持ちにさせることである。加賀エリアでは加賀太鼓を教わり実践する太鼓愛好家が少なくないが、「見せる芸能」として発展してきたこのパフォーマンス・スタイルが新たな実践者を生み出すというのは、後で見る「創作太鼓」とこの加賀太鼓のほぼ限られるようだ。

和倉の温泉太鼓も能登の太鼓がベースだが、これを数名の叩き手が入れ替わり立ち替わり叩くのである。太鼓には鉦（カネ）が加わる。バチが太鼓の面に当たっていない間に、宙を見上げるなどして柔らかな動きを出すのが特徴的で、ここでもバチさばきの「巧さ」やその粋な様子が、見る者に強い印象を与える。加賀太鼓と同じく、こちらも、はっぴや足袋、鉢巻きというユニフォームで演奏する

4 ステージで見せる民俗芸能としての太鼓——御陣乗太鼓など

次は、先ほどと同じく「見せる民俗芸能」でありながら、もとよりステージで演奏することが前提となって生まれたパフォーマンス・スタイルである。ここでは、相当にデフォルメされた演出が

目立つようになる。

この代表は奥能登の御陣乗太鼓であり、能登の太鼓を基本としながら、和太鼓パフォーマンスとしては世界でも最も知られたもののひとつに数えられる。ひとつの長胴太鼓をめがけて、数名の「不気味」とも言える鬼面をつけた男たちが次々と叩きにやって来ては、怒号をあげて足を大きく踏み鳴らしたり、太鼓の胴を力いっぱい叩くなどする演出が、太鼓の演奏に織り交ぜられている。1つの太鼓で生み出しうるパフォーマンスとしては、最大級の迫力があるといえよう。

御陣乗太鼓をはじめとする鬼面タイプの太鼓といえ、日本の国内旅行ブームの時期にそのパフォーマンス・スタイルが形成されたと思われるかもしれない。だが、実際のいきさつはもう少し複雑である。現在の御陣乗スタイルを確立した人物の池田庄作氏によると、それまでも地域の祭りだけでなく、県内のイベントなどに出演してきた御陣乗太鼓に転機が訪れたのは昭和 35（1960）年の正月のこと、東京の帝国ホテルに招かれて外国の大使らの前で演奏し、それに続いて他の企業の新年会でも演奏した時のことである。ある会社の社長に、「お前たちの太鼓はまことに良いが、はじめも終わりもなく、ぷつり、ぷつりとやるところがいけない。何ごとも始めと終わりがあるものだ」といわれた池田氏は、一本調子の祭りの太鼓とはちがう、「ひとつのもの」としての太鼓パフォーマンスを作らなければならないと決心した。その後、昭和 37（1962）年に行われた（イスラエル政府の招きがきっかけとなった）5 か月にわたる海外演奏旅行を通じて、ステージの両脇から勢いよく登場する演出や、太鼓の間合いとリズムに打ち方の強弱の変化をつけることなどの工夫が練られていった。

この御陣乗太鼓パフォーマンスの形成過程が興味深いのは、彼らの身体表現が、何を期待してよいかわからない観客を前にして初めて生まれたものだという点である。不気味なほどに誇張された演出や、半年に一度もの頻度で皮の張り替えをしなければならないほどに力いっぱい叩かれる太鼓の音は、そこに由来するのだろう。舞台そでから勢いよく登場することで「はじまり」、15 分後に急速に太鼓を叩くテンポをあげきったところで「おわる」という演出についても、同様である。

御陣乗太鼓とはかなり異なるスタイルではあるが、辰巳こんころ太鼓（金沢 34）や城山太鼓保存会（加賀 19）もこのカテゴリーに入れられるだろう。どちらも、もとよりステージ上で演奏されることを想定して演出された太鼓芸である。そして、温泉太鼓とは異なり、あまりにも劇的に作り上げられているという理由から、素人が趣味でまねようという気にはならないあたりも、共通している。

5 創作の太鼓

最後が創作の太鼓である。厳密に言えば、御陣乗太鼓なども「創作芸能」なのだが、ここで「創作」というのは、御諏訪太鼓や鬼太鼓座がブームの火付け役となった、創作組太鼓のことである。このパフォーマンス・ジャンルの表面的な特徴は複数の太鼓の合奏だが、筆者の考えでは、それが前提としているのは、「ジャパネスク」な演出と「西洋的アンサンブル志向」である。

前者から説明しよう。しばしば指摘されるように、「和太鼓」と呼ばれることの多いこのジャンルは、そもそも海外での評判に支えられて発展してきたものである⁹。鬼太鼓座を発足させた田 耕^{でんたがやす}も、当初から明確に外国で受け入れられる芸能を目指していた。野良着をモチーフとした衣装や、裸にフンドシを締めるといった演出も、いかにもエキゾチックな日本を表現しようとしている。禁欲的な「修行」のイメージや、男性の場合に特に強調されるマッチョさについても、同様である。

次に、後者の「西洋的アンサンブル志向」についてであるが、これは具体的にはいくつかの傾向になって現われている。第一に、創作組太鼓がそもそもステージで演奏されるものとしてデザインされている点である。御陣乗太鼓なども、ステージで演奏されるべく発展してきたパフォーマンス・スタイルだが、太鼓の数がこれだけ違うと、たとえば2千人規模のコンサートホールで聴衆に与えるインパクトを考えた時に、相当な違いがあることが分かる。それに関連して、創作組太鼓では、音と身体の動きがユニゾンを基本にして、規範化されている。創作組太鼓のレパートリーの大半が楽譜化されているところにも、この志向が現われている。そして、これまでに見てきた太鼓とは異なり、創作組太鼓のパフォーマンスでは、モチーフが次々と展開するタイプの「曲」が演奏される。創作組太鼓以外の太鼓のレパートリーのほとんどが、基本パターンの繰り返しだということを考えると、両者の根本的な違いがわかる。創作以外の太鼓では、その基本パターンを繰り返すなかに即興風の個人の「技」が出てくるのだが、これは、創作組太鼓にはあまり見られないパフォーマンスである。

すなわち、「西洋的アンサンブル志向」という特徴が、前項までの演奏スタイルの太鼓と創作の太鼓を分けているのである。いま便宜上、前者を「伝統の太鼓」と呼ぶとすれば、伝統の太鼓と創作の太鼓の間には、パフォーマンスに対するアプローチに根本的な違いがあるということである。たとえば、伝統の太鼓のなかにも非常に入念な練習とリハーサルにより演出されているパフォーマンスがある。しかしその場合でも、そこにはパフォーマンスがいかに進行するかを指示する具体的なもの——楽譜や監督する人物——は無いのが普通である。

同じことを別の角度から述べてみよう。たとえば、創作の太鼓にも伝統の太鼓にも、「息の合った演奏」はあるが、両者の間では「息が合う」ことの意味合いが異なってくる。創作太鼓の場合、演奏の息が最低限合うということは、楽譜に代表される外在的な演奏の指示のもとで、複数の演奏者が一つのパフォーマンスを形作ることを意味する。それに対して伝統の太鼓で「息が合う」ということは、あくまでも個別の「技」や「芸」をもった複数（大抵は2人）の人間の演奏がひとつのパフォーマンスを形作ることである。この時、誰にでも通用する客観的な規範は、最低限の決まりごとを除けば、あまりあてにならない。こう考えると、西洋的なアンサンブル志向とは、ある種のパフォーマンスの合理化に基づくのだと考えることが可能になるのである。

⁹ この点については、野澤豊一・西島千尋「石川県能登地方の県下太鼓打競技会」（2010年『人間社会環境研究』第20号、pp.55-71）の第2節で述べてある。

IV おわりに——まとめと展望

以上、『いしかわ太鼓まっぷ 2010』で集めた資料を整理し、そこから若干の分析を試みた。それにより、4つのエリアの特徴、とくに奥能登エリア、口能登エリア、それに加賀地方（金沢＋加賀エリア）の異なる特徴が、可視化できたと思う。それぞれの地域に独自の伝統の太鼓文化があるが、能登地方の方が伝統の太鼓が根強い。一方で、和太鼓ブームとつながりの深い創作組太鼓は、金沢と加賀エリアで特に広がっている。このことは、奥能登エリアではキリコ太鼓が、口能登エリアでは比較的新しい競技会タイプの太鼓が盛んであるのに対して、加賀地方の虫送り太鼓の多くが既に衰退していることからわかる。

第3節では、『太鼓まっぷ』で得られた情報から石川県の太鼓文化の類型化を試みた。これはまだ十分に練られていないものだが、一つの地方に限らない一般性をもつ可能性はあると思われる。なかでも、最後に提示した「創作と伝統を分け隔てるもの」という論点は、もう少し追求する価値があるだろう。今後の現地調査を通じて、掘り下げたいところである。

また、この報告書では、文献調査による歴史的背景をあまり行えなかった。これをより十分に行い、各々のパフォーマンス様式の変化を詳細に跡づけることで、土着的な民俗芸能と近代との関連をより詳しく研究することができるだろう。同じく今後の展望として、太鼓スタイルの多様性と同一性の研究がある。奥能登のキリコ太鼓のような集落単位で実演されるパフォーマンス様式に見られた多様性と、超集落のレベルで行われる競技会タイプの太鼓パフォーマンスに見られる様式の収斂の様子からは、文化様式の多様性について、興味深いケーススタディが行えそうである。